

# 固有名の剥奪，名づけえぬものの歓待 —— ジョゼフ・コンラッド「ある船の話」の “room”における周縁

井出達郎

本講義は、ジョゼフ・コンラッドが1925年に発表した短編「ある船の話（“The Tale”）」を取り上げ、連続講義全体のテーマとなっている「周縁」という視点から論じるものである。この短編は、単に“tale”と題されているように、登場人物も場所もことごとく固有名が削ぎ落とされており、「ある男」が「ある女」に、「ある船」で起こった出来事を「ある部屋」の中で語る、というかたちをとっている。今回の講義では、その形式と内容が互いに関連し合いながら、周縁という場所の問題が、何よりも名前というモチーフと自然につながっていくことを浮き彫りにしていく。そして最終的に、名前の問題が舞台となっている“room”という小さな空間へと結びつき、周縁という場所が持つ両義的な意味——固有名の剥奪と、名づけえぬものの歓待——が浮かび上がってくることを明らかにしたい。

## 1. 周縁という場所と固有名の剥奪

物語は日没の時刻に暗闇に沈んでいく「ある部屋」の描写から始まる。その部屋には一人の男と一人の女がいる。名前、関係、目的などが何も説明されないまま、女の「何かお話をしてほしい」という誘いを受け、男が「どこかある世界で起こった」という前提で「ある話（a tale）」を話し始

める。その「ある話」とは、世界大戦の最中のイギリスの巡視船の司令官をめぐるものだった。航海をしていたあるとき、司令官は霧の中で身元不明の船に出会う。その身元不明の船の船長は自分たちを「中立国」のものだと主張するが、司令官はそれを信じることができない。そして、敵国の船ではないかという疑念を払うことができなかった司令官は、その船にあえて暗礁への航路から退去するに命じる。司令官の思惑は、その船の船長らが嘘をついており、暗礁への航路を避けることでそれが明らかになる、というものであった。だが船は命令に素直に従って暗礁へと航路をとり、そのまま沈没してしまう。以上の「ある話」を話し終えたあと、男はその司令官が実は自分であったことを告白する。

男が話す「ある話」は、世界大戦のような国が国境を越えて混じり合う大きな場を舞台にしながらも、その話が明らかにされるのは国際裁判のような大きな場ではなく、ひとりの女だけによって聞かれる極めて小さな場所、周縁というべき場所において語られる。だがこの作品における周縁という問題は、そうした空間において描かれる以上に、名前というモチーフにおいて、特に、固有名が剥奪されるという出来事において描かれている。固有名の剥奪という出来事は、何よりもまず、沈んでしまった中立国の船の船長とのやりとりにもとることができる。濃い霧の中で突如として現れたその中立国の船に対して、司令官であった語り手の男は敵国に救援物資を渡しているのではないかと疑い、その船の船長の側からされる中立国であるという主張を信じることができない。このとき見逃せないのが、男が信じることができないその話が“the tale”と表記されている点である。“tale”という語は、いうまでもなく、固有名をもたない「ある男」と「ある女」の語りによって始められている作品そのもののタイトルに重なっている。この入れ子の構造は、“tale”を話す中立国の船長もまた、固有名を

もたない存在であることを示唆している。

同じことは船長の「中立国」という所属からも読みとれる。原文の英語では“neutral”となるこの語は、語源的な成り立ちとして、「どちらでも」を意味する“utral”という部分と、「ない」という否定を意味する“ne”という接頭語とが組み合わさってできている。その組み合わせは、「中立である」という肯定の意味ではなく、「どちらでもない」という否定の意味で、特定することができない状態、すなわち、固有名として名づけられない状態を示唆するものになっている。

さらにこの作品で特徴的なのは、沈んでしまった船において分かりやすく強調されている固有名の剥奪という出来事が、実のところ、命令を下す側である主人公の男にも当てはまる点にある。力を行行使する側にいる男もまた周縁的な存在であることは、何よりも、彼が「部屋」という場所にいる名も無き“a man”として登場するという根本的な設定にみることができる。加えて、“a man”として語る話の中で、後に彼自身であることがわかる司令官についても、ただ“the commanding officer”と表記されているだけである。外枠の語りにおいても、内枠の語りの中においても、男に固有名が与えられることはない。

男が固有名を剥奪されていることは、さらに、彼が“command”を下す立場にあるという点に逆説的に示されている。男が“commanding officer”として中立国の船に立ち退きを命じるとき、男は国という境界線を越えるようにして、国際法的な立場から権力を行行使しているといえる。憲法学者である木村草太は、そもそも法というものが機能するためには、「すべての人に対して、状況によってはその法の適用を受ける可能性が開かれていなければいけない」（大澤／木村 20）という理由から、「固有名を使ってはいけない」という条件があると述べ、その条件が最高に発揮されるのが

## 固有名の剥奪、名づけえぬものの歓待

国際法であると指摘している。国際法とは、国というそれぞれの境界を横断するようにして、「すべての人」という抽象化が最も求められるためである。木村の論を援用すれば、男が中立国に対して“command”を下すという行為は、そのまま自らの固有名を失う行為を意味することになる。この意味で、権力を行使される“neutral”な存在に加えて、“commanding officer”である彼もまた、固有名の剥奪という出来事を通して周縁化されている。

### 2. 周縁のもう一つの可能性 —— 名づけえぬものの歓待

こうして作品は、固有名の剥奪という出来事を通して周縁を描いている。しかしそこで特異なのは、そこで描かれる周縁という場所が、単に周縁化された存在が押しやられるという否定的なものというだけでなく、そのようにして名を奪われたものたちを受け入れる場に反転する可能性を秘めていること、すなわち、名づけえぬものを歓待する場に反転する可能性を秘めていることも描かれている点にある。

周縁という場が秘める歓待の可能性は、「ある船の話」を男が始める前、その語りの舞台となっている部屋の場面において、予告的に暗示されている。冒頭間もない場面において、女は何の前触れもなく、唐突に「何かを話して」と男に言う。この唐突な頼みを語り手は、「きまぐれな意志 (capricious will)」と表現しながらも、それをひとつの「法 (a law)」のように感じ、それに従うかたちで話始めることになる。理由もなく相手が言ってきたことに従うというこのエピソードは、続く「ある船の話」の中で起こる、よくわからないものをそのまま受け入れる行為、つまり、歓待という行為の確かな予告になっている。

そのようにして始められる「ある船の話」の中には、はっきりと歓待と

### 固有名の剥奪、名づけえぬものの歓待

いう出来事が描き込まれていく。それは何よりも、司令官の男が下す退去の命令に、最終的には中立国の船長が従ってしまうという展開に見てとることができる。一見すると、死刑までほめかされた中立国の船長がとった行動は単に司令官を恐れた結果でしかなく、歓待するといった行為にはとても見えないように感じられるかもしれない。しかし少なくとも、結果として従ったその行為には、他者を無条件に受け入れるという歓待の意味合いが確かに含まれている。歓待というテーマについて思索したフランスの哲学者のジャック・デリダは、たとえ死の危険があろうとも、むしろそうした危険があるときに、無条件に受け入れることが歓待である、という刺激的な考えを提示している。『歓待について』と題された著作の中でデリダは、聖書のエピソードをひきながら、「絶対的な歓待」のためには、「異邦人に対してだけではなく、絶対的な他者、知られざる匿名の他者に対しても贈与しなくてはなりません」（デリダ 64）と述べ、歓待という行為がもつ徹底さを強調している。到来した匿名の他者に対して場を提供する、何も要求せず、名前さえ尋ねないといったこの歓待の考え方は、それだけ見れば、中立国の船長の行動にそのまま重なっている。

この暗示的にほめかされる歓待のモチーフは、話をすべて聞き終わった後、女がとる行動によってはっきりと前景化される。自分でさえも名づけようもない過去の行為を告白した男に対して、女は涙を流しながら、男を抱きしめる。男は正しいことをしたのか、誤ったことをしたのか、という二者択一の問いをそのままにしたままで、女は男を何の条件もなく受け入れる。固有名の剥奪という出来事を通して描かれてきた周縁という場所は、このとき、名づけえぬものの歓待というもう一つの場所でありうる可能性を示している。

### 3. 余白としての“room”

物語の終わりの数行は、この歓待の場としての周縁の可能性を開かせながら、そもそもこの物語の舞台となっていた“room”という場所について考察する手がかりを与えているように思われる。最後の別れの場面において、女は「ああ、私のかawaiiそうな、kawaiiそうな —— (Oh my poor, poor —)」(81) と呼びかけ、男は「俺にはずっとわからない」と言いながら部屋を出ていく。この最後の言葉で重要なのは、どちらの言葉も男の存在を不確かなままにさせるもの、言い換えれば、男の存在に「余白」を残すものになっていることである。女の方は、“Oh my poor, poor —”という言葉を発した後、男が何ものなのかを示すはずの“poor”の後の部分が、ダッシュによって、文字通り余白になっている。そして男の方もまた、告白の最後の「自分はどちらだったのか」という問いをひきずりながら、そのどちらにも答えを出すことなく、自分自身に対して「余白」を残しつつける。この二人の言葉は、“room”という語がもともと持つ「余白」「可能性」といった意味をそのまま重なりながら、自らを名づけえぬものとして保ち続けている。

最終的に部屋を出ていく男は、「ある部屋」における「ある男」という存在から、再び固有名を持つ存在、名指しされる存在へと戻るほかない。しかし男が出ていく一方で彼を抱きしめた女が部屋に残り続けることは、名づけえぬものに対する歓待の可能性が残りつつけていくことを示しているように思われる。コンラッドの描く周縁とは、固有名の剥奪という出来事のある場であると同時に、名づけえぬものを歓待するという特異な「部屋／余白」という場としてある。

固有名の剥奪, 名づけえぬものの歓待

引用文献 (当日の公開講義の中で扱ったものも含む)

- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness*. 1899. New York : Norton, 2006.
- . “The Tale” 1925. *The Corrected Works of Joseph Conrad*. Vol. XXII. London : Routledge, 1995. Print.
- Stape, J.H. *The Cambridge companion to Joseph Conrad*. New York : Cambridge UP, 1996. Print.
- 大澤真幸／木村草太『憲法の条件——戦後70年から考える』NHK出版新書, 2015年。Print.
- ジャック・デリダ『歓待について——パリのゼミナールの記録』廣瀬浩司訳, 産業図書, 1999年。Print.
- 武田ちあき『コンラッド』勉誠出版, 2005年。Print.